

らいぶ LIVE 創 REATOR つくりえいたー

NO.52
研究広報誌

教育研究発表会
2010の
お知らせ

CONTENTS

- 研究会開催に当たって..... 1
- 研究会各授業PR..... 2
- 学習紹介：低学年から聴き合い、学び合える場をつくる（第1学年国語）..... 3
- 学習紹介：国で子どもを育てるフィンランド..... 4
- 学習紹介：電気を描こう！電気を試そう！..... 5
- 学習紹介：ふるさと和歌山（地域）に学び、和歌山を愛する子に..... 6
- 学習紹介：障害リレー遊び..... 7
- 学習紹介：地球にやさしく・人にやさしく・自分にやさしい消費者をめざして..... 8

学びの質の高まりをめざして

～「吟味を生み出す」対話をつくる～



◆ごあいさつ

一人ひとりの学びから学校全体の学びを追究する中で、小グループでの活動を重視し、協同的な学びを求めて「ジャンプのある学び」を提起してきました。その一端を昨年度『質の高い学びを創る～授業改革への挑戦～』（東洋館出版、2009年10月刊）にまとめて出版しました。その後、子どもの学びの質をいっそう高めていくために、対話の中に対象の本質や価値・真理などに迫るための「吟味」を生み出すことによって学びの質の高まりをめざしてきました。

当日は、研究授業や研究協議会を通して取り組みの成果の一端をご覧いただき、ご参加のみなさまと共に深め合いたいと思います。午後には、昨年度に引き続き、東京大学大学院教授秋田喜代美先生にお越しいただき、午前中の公開授業を受けて「学びの質の高まりを目指して～『吟味を生み出す対話』をつくる～」というテーマのもとお話をしていただきます。新学習指導要領の全面实施を直前に控え、子どもの力を引き出し育てる実践を生み出す研究発表会になることを願っております。

皆様方のご参加を心からお待ちしております。

学校長 川本 治雄

平成22年10月30日（土）

期 日	平成22年10月30日（土）															
	8:00	8:40	8:55	9:10	10:10	11:10	12:40	14:00	15:45							
日 程	受付	概要発表	移動	研究授業 I	移動	研究授業 II	移動	協議会	昼食	全体会	講演会					

主催・会場
後 援

和歌山大学教育学部附属小学校
和歌山県教育委員会 和歌山市教育委員会
和歌山大学 和歌山県市町村教育委員会連絡協議会
和歌山県連合小学校校長会 岸和田市教育委員会
阪南市教育委員会 泉南市教育委員会 岬町教育委員会



講演／講師
東京大学大学院教授
秋田喜代美先生

らいぶスクエア

年・組 教 科	授業者 単 元	研究発表会 各授業 P R
1-A 国 語	須佐 宏 くじらぐも	みんなが気づけなかったことや「なるほど」という発見を「きらきらきらりん」とよんでいる子どもたち。本時でどんな「きらきらきらりん」を見つけられるでしょうか。
1-B 算 数	宇田 智津 くらべよう	どちらがひろい？ 日常生活の経験をもとにどのような方法で広さを比べることができるのか、直接比較→間接比較の考えにつながる考え方を子ども達と一緒に探っていきます。
1-C 生 活	居澤 結美 たのしいあそび あつまれ！	秋のものを使い「おもちゃづくり」をします。自分が楽しめるもの、そして「おもちゃフェスティバルに向けて」、どんな工夫が出るか楽しみです。
2-A 音 楽	田辺 麻衣子 シンコペーテッドクロック	『シンコペーテッドクロック』に歌詞を付ける活動から、曲想にせまりたいと考えています。何度も口ずさむうちに曲のおもしろさを味わえるようにしていきたいです。
2-B 体 育	谷口 佳都司 わくわく！ジャンプランド	子どもたちが跳ぶ動きの新たな楽しみ方を発見できるように、仲間との「かかわり」を大切にしながら、グループ学習を中心にした体育授業で目指していきます。
2-C 算 数	土岐 哲也 かけ算	新幹線に乗ってみんなで旅行！新幹線の座席に2Cのみんなで座ったら、どんな座り方があるんだろう？式や図で表したり、考えたりします。
3-A 総 合	山中 昭岳 ネット de カルタ	自分たちの身のまわりの自慢をカルタで表現します。遠く離れた交流校のみんなにネットを通して自分たちのよさを伝え、「行ってみたいな」と思わせることができるでしょうか。
3-B 社 会	松尾 光孝 和歌山市の仕事人	和歌山市で働く人々と出会い、その人たちの「こだわり」を追求しながら、自分の生活とどう関わっているのかを見つめ直します。今回はこだわりのスーパーマーケット編です。
3-C 図 工	西井 恵美子 木でできタワー	木のよさやおもしろさを体いっぱいを感じ、やってみたいことをいろいろ試しながら、自分の表したいことを深めていきます。
4-A 国 語	北川 勝則 ごんぎつね	ごんの兵十への思いと兵十のごんへの思い。この2つの視点を平行して読み進めていきます。そのギャップをもとに、最終場面における両者の心情を読み深めたいと思います。
4-B 理 科	中西 大 ものの温度とかさ	温度によって空気がどう変化するのか…。自分なりの実験で、結果まで明確な予想をもって活動し、友達の活動と比較しながら考察を深めていきます。
4-C 社 会	梶本 久子 ふるさと発見プロジェクト	和歌山の宝物「和歌山城」に訪れた観光客の声を徹底的に聞き取りました。大好きな「和歌山城」に寄せる、熱意あふれる話し合いをご覧ください。
5-A 国 語	中西 正子 大造じいさんとガン	椋鳩十の作品に多くふれ、学び合うなかで、野生動物の生き様やそれを目の当たりにして心動かされる人間の姿を読み味わいたいと考えています。
5-A 音 楽	江田 司 旋律づくり	音を音楽に構成していく過程を、「音楽の仕組み」「はじめ・なか・おわり」をキーワードに、調のある音楽での音楽づくりの活動から明らかにしたいと考えています。
5-B 社 会	片桐 宏 ジュース工場のみみつ	今夏は記録的な猛暑でお茶やジュースが必需品でした。紀の川市のジュース工場を調査・見学する活動から、工場のしくみや働く人の工夫や努力について学びを深めます。
5-B 理 科	辻本 和孝 もののとけ方	「とける」とはどういうことなのか、実験・観察を行い、探っていきます。そして、「とける」現象をイメージ図で表現し、科学的な見方や考え方を深めていきます。
5-C 外国語活動	辻 伸幸 I study Japanese.	海外の小学校とお互い学んでいる教科について伝え合う国際交流活動の前段階です。外国語活動授業展開プロトタイプを使用し、質の高い学びを目指します。
6-A 家 庭	藤原 ゆうこ とっておき★マイライフ	“地球にやさしく・人にやさしく・自分にやさしく”という3つの視点を大切に、消費生活のあり方を考えます。38人それぞれが、とっておき☆マイライフを見つけられますように！
6-B 体 育	上野 佳彦 跳び箱	DVDやデジタルカメラの動画機能や連写機能を有効的に活用し、自己の動きを認識させることで、めあて意識を高め、かかわりを深め、学びの質を高めていきます。
6-C 理 科	馬場 敦義 水よう液の性質	いろいろな水よう液の性質やはたらきを調べることを通して、自然事象の“本質”をさぐる理科の学びをつくっていきます。振り返る場面で、思考し、表現する力を高めていきます。
12F 算 数	市川 哲哉 1年たしざん 2年かけ算	間接指導時にどれだけ子どもたちだけで授業を進められるかがテーマです。複式6年間の教育を考えて、低学年の時期に学び方をしっかり伝えることが大切だと考えます。
34F 国 語	三上 祐佳里 3年モチモチの木 4年ごんぎつね	「ほんとおくびょうなのかな？」「最後にしかなかったのかな？」「こんなときだから」「もし～だったら？」と条件や仮定を考えて物語を読んでいきたいと思ひます。
56F 理 科	西村 文成 5年もののとけ方 6年水よう液の性質	“とける”をキーワードに複式らしさを生かし、『とける』という事象について、見えることから見えないことへ思考をめぐらせ追究していきます。

キーワードは、“きらきら☆きらりん”

～低学年から聴き合い、学び合える場をつくる～

国語科
1年 A組担任
須佐 宏

私が、「協同的な学び」を意識した授業づくりを始めたのは本校に佐藤学先生（東京大学）をお招きしての研究が始まった5年前。最初に取り組んだことは「聴く」を大事にすることであった。互いの考えを受容的に受け止めながら学び合える場であることが、国語科の授業はもちろん、他教科・領域すべての学習場面で大事だと考える。

★聴き合い、学び合う場であるためのキーワードづくり

受容的に聴き合い、学び合う場にするために具体的な手立てとして私が取り組んだことは、学級独自のキーワードをつくることだ。その学級に属する子どもたちだけが共通理解して使う聴き合い、学び合う場にしていくためのキーワードだ。例えば、高学年では、「アシスト」という言葉をキーワードにした。サッカーでシュートにつながるパスをさして使う言葉だが、4人グループで話し合った際、「いいな。」と思った友達の発言を全体の場で積極的に紹介する発言を「アシスト発言」と呼ぶことにした。そうすることで、友達の発言と自分の考えとの距離を測りながら聞けるようになる。（※詳細は、拙書『質の高い学びを創る授業改革への挑戦・新学習指導要領を超えて』2009/11.東洋館出版を参照していただきたい。）中学年では、「びびっと」という言葉をキーワードにした。友達の発言を聞いて、何かを感じたときに「びびっと」という言葉を使うことで、「アシスト発言」同様に、全体の場で紹介し、学級全体で共有できるようにする。

★1年生では“きらきら☆きらりん”

今年1年生を担任している。自分のことで精一杯の1年生の子どもたちを、聴き合い、学び合える学習集団にしていくために使っているのが“きらきら☆きらりん”である。みんなが気づけなかったことに気づけていたり、「へえ、なるほど。」というような発見があったりしたとき、それを「きらきら☆きらりん」と呼ぶことにし、教室黒板に貼ってある手のひら大の星形を、発言のあった子の上でかざすようにしている。この“きらきら☆きらりん”が、出ると教室全体が得をしたような明るい雰囲気になるから不思議だ。1年生の子どもたちなりに、聴き合うことによる学びを実感できているのだと思う。

★1年国語『はなのみち』での“きらきら☆きらりん”



1年国語『はなのみち』を例に実際の学びの様子を紹介する。授業の前半、4場面を音読した友達の読み方について話し合った場面。声の大きさや姿勢など、友だちの読み方のよいところを発表し合う中で、間を開けていることを評価する発言を取り上げ、「あたたかいかぜがふきはじめました。の後はどうしてあけるのがいいの？」と問いかけた。子どもたちは、「あけたほうがこえがきれいにきこえるから。」「ふきはじめました。ってさいごにまるがついているから。」「ここはあいだがあいているから。」など思いつくままに理由を発表したが、間の意味に気づけている子はいなかった。そこで、「あたたかいかぜがふきました。」の文と「あ

たたかいかぜがふきはじめました。」の文を示し、どう違うかを比較させた。子どもたちは文の違いに着目しながら、意見をつなぎ、「『ふきました』だと花のみちにならない。」というTくんの発言を受けたSくんが、たどたどしい言葉ではあるものの、「あのね、たねがね、ええとね、かぜがね、いっしゅんふくだけやったらね、（花のみちには）ならんから。」と伝え、それを受けた子どもたちが、「だからかあ。」「わかったあ。」「Sくん、きらきら☆きらりんや。」「きらきら☆きらりんや」と言い、手で風が吹く様子をして、Sくんの発言の意味を確かめていた。ここでは、子どもたちの読みの実態を教師がとらえ「ふきました。」と「ふきはじめました。」という文章表記の違いに焦点化することによって、子どもたちが、自分たちの気づきを互いに伝え合いながら、時間の経過が表されていることに気づくことができた。



国で子どもを育てるフィンランド

昨年に引き続きフィンランドに教育視察に行くことができた。今回はひとつの小学校に3日間訪問でき、じっくり視察できた。2年間にわたってフィンランドの教育に触れてきて、国全体で子どもを育てていると感じた。

複式部
市川 哲哉



少人数をつくる

私が訪問した学校は、ヘルシンキから少し離れた小さな複式の学校だったが、登校・下校が全員一斉ではなく、フレックスタイムのようなシステムを採用していた。例えば、5・6年生の場合、朝から5年生だけが登校し、国語算数の2時間の授業をする。3時間目から6年生が登校して、両学年での授業を2時間行う。お昼になると、5年生が下校。午後からの2時間は6年生だけで国語や算数を行っていた。週時間は日本よりも少ない。それもこのようなことができる要因だろうが、毎朝の「朝の会」から始まって、「終わりの会」で終わることに慣れている私には新鮮だった。また複式の学校だからというわけではなく、大きな単式の学校でも、約20人の1クラスを10人くらい2グループに分けて同じようにしているという。少人数にするために工夫していた。その上この学校では、3クラスで1人の補助の教師がついて、個別指導をしていた。1人1人の子どもに教師が手厚く、深くかかわることが当たり前になっている。こんなところにこの国の学力世界を支える力を垣間見えた。



前では担任の教師が全体で授業を進め、後ろでは別の教師が個別指

教科書・ワークブック中心の授業

学力世界一といわれるフィンランド。どれだけ素晴らしい学びを授業で作り出しているのかと楽しみだったのだが、そこで行われていた授業は、教科書・ワークブックを中心とした授業だった。特に発問の仕方に工夫したとか、子どもの興味をひくために道具を用意したというようなことはあまり見受けられなかった。もちろん教師は子どもたちにとっても献身的に接していたし、努力もされていた。ただ特に自分のカラーを出すとか、授業を工夫するといったレベルではなく、教科書・ワークブックを使って淡々と教えているというように感じた。しかし日本も昔そうだったように、これを徹底することが全体のレベルアップにつながるのだろうか。



ワークブックに直接書き込みながら授業を受ける子ども

すべて無料

フィンランドの教育の話ではよく聞くことではあるが、本当に無料だった。子どもたちが使うノートも大きなロッカーに全学年分のものがたくさん入っており、そこから補充していた。また、家の遠い子どもはタクシーで登校。大型ワゴンのタクシーで、たかさんの子どもたちが通っていた。給食費も無料。私の訪問した学校は2限終了時に食事をとっていた。ランチというところだろうか。日本の給食のように、子どもたちで用意をして片づけてというのではなく、給食センターから運ばれてきたものを、並べて、自分の好きなものだけ好きな量だけ取っていくバイキングスタイルだった。一斉に「いただきます」と言うこともなく食べ始めていた。午後お腹がすいた子どもは、家から持ってきたスナックバーを一かじり二かじりしていた。



これがタクシー。たかさんの子どもたちが下りてきていた。



バイキング形式のランチ。座席も決まっていない。

フィンランドの常識？

日本では当たり前に行われている入学式と卒業式。フィンランドではそれが無い。学校自体は、小学校・中学校・高校・専門学校などいろいろあるが、全教育課程を一貫したものと考え、高校卒業の最後にセレモニーをするようである。間の小学校や中学校の卒業式や入学式は存在しない。それぞれの学校で育てるのではなく、小学校から高校までを一つの教育と考えているようだ。

電気を描こう！電気を試そう！

～イメージ化やモデル化を通して～

理科
4年B組担任
中西 大

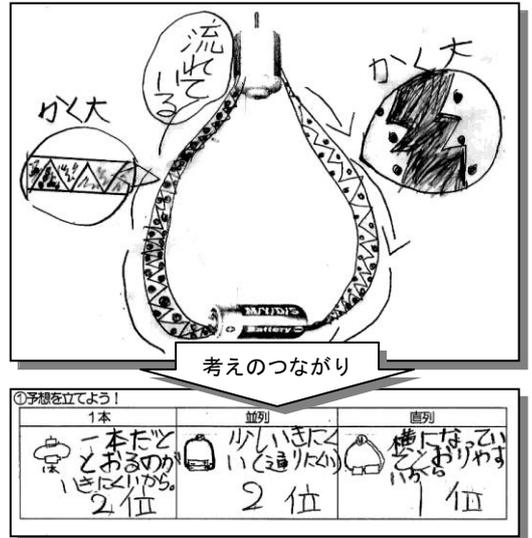


理科の授業で扱う事象には、そのままでは目に見えないものがあります。例えば、空気や電気、熱などです。これらの事象を、目に見えるものとして扱えるようにイメージ化・モデル化し、学習を進めています。イメージ化して考えを交流したり、モデル化して実験したりすることにより、分かりやすく実感しやすいものになると考えたためです。ここでは、4年生の理科『電気のはたらき』の単元で、電気が流れる様子をイメージ化・モデル化した実践を紹介します。

【イメージ化】

電流という言葉にもあるように、電気が流れているのならどのように流れているのか。イメージ図を描かせて自分の考えを表出させました。子どもたちは、電気が「雷マーク」「つぶつぶの何か」「液体」などの考えを出しました。これらのイメージをもとに、乾電池の直列つなぎや並列つなぎにおける電流の強さを予想させたところ、多くの子どもたちの予想が的中しました。

イメージ化することで、自分と相手の考えに違いがあることがよく分かります。違いがあると知れば、分かりやすく説明して自分の考えを納得してもらえよう言葉を選び、積極的にかかわろうとします。本学級の子どもたちは、イメージ化を通して、「ものがぶつかると流れが鈍くなる」という考えを共有して予想を立てることができました。

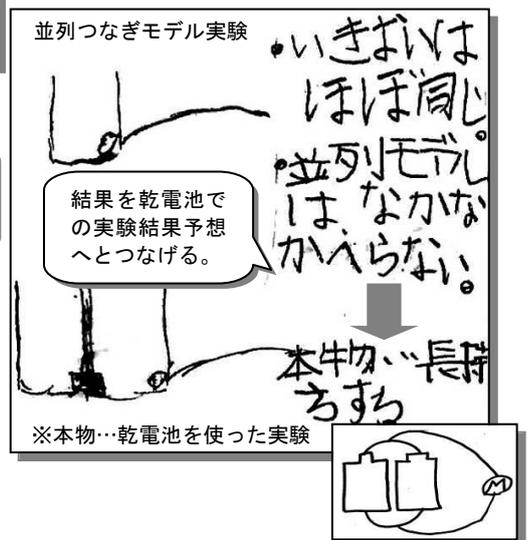
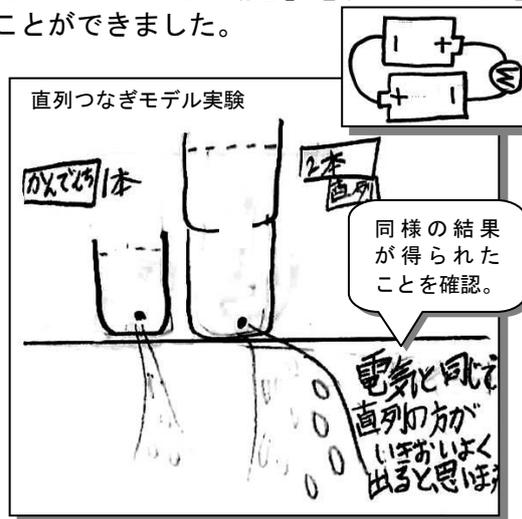


【モデル化】

乾電池の直列つなぎや並列つなぎにおいて、電気が流れる強さをさらに身近なものとして実感させるため、電流を水流に置き換えてみました。右の写真は、乾電池のつなぎ方をモデル化したものです。ペットボトルの底には流れ口の穴があり、並列つなぎはストローで隣のペットボトルとつながっています。これに水を入れ、水流を観察します。

まず、直列つなぎのモデルで実験し、水流でも同様の結果が得られることを確認しました。次に、並列つなぎのモデルで実験したところ、水がなかなか減らないことから、「並列つなぎは、電池がなかなか減らないんじゃないかな」という考えにつながることができました。

イメージ図ではとらえにくかった「動き」を、モデル化することで確認することができました。



ふるさと和歌山（地域）に学び、和歌山を愛する個に

～紀州 55 万石元気プロジェクト～（昨年度 6 年生の実践）

社会科
4年C組担任
梶本 久子

地域に学ぶとは、教材との出会いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのふれあいの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることだと考えています。そこで、身近な地域とのかかわりの中で見出したよさを実感し、地域との主体的なかかわりをもとうとする子ども、すなわち地域を愛する子ども（個）を育てたいと考え、1年を通して「和歌山」にこだわった学習を計画しました。

■紀州 55 万石元気プロジェクト ～未来のまちづくり～**○政治と自分をつなげて**

本単元では、学習内容を効果的に理解させるために、身近な和歌山県の県議会を見学することから、興味関心を喚起し「政治の学習」の入口として「県の課題や将来」を取り上げました。住民や県庁への聞き取り、大学生ボランティアとの学び合いを通して、自分たちのまちの政治に対し切実な願いをもち、政治の役割を理解することをねらいとしました。昨年度の政権交代という大きな変化の中、政権交代・マニフェストなど、子どもたちの話題に政治のことが多く上っていました。世の中の変化を肌で感じている「旬」を逃さず、県政や国政に興味を持たせたいと考えました。

○「ひとり学習」と「全体学習」をつなぐ工夫

ひとり学習や全体学習で学んだことを、それぞれの子もたちの考えを活かして、①教育 ②福祉、健康 ③産業 ④観光・環境 ⑤安全・防災の5つの政治グループに分け、地域の実情を調べ、日常生活との結び付きを大切に子どもたちの視点で取り上げていきました。グループごとに大切にしたいことから「和歌山を元気にするマニフェスト」を作成し、ひとり学習、グループ学習の中で追求させました。話し合いの中で出てきた個々の課題を発表し合い、同じ内容ごとに分類し、課題を確かめ合うことで、クラスの学習課題が考えやすくなり、調べる課題の必然性が明確になり、意欲的に調べ活動ができるようになると思われました。

○単元の終末に（作文より）

自分の家の人に「和歌山の未来」を聞いても「そんなん考えたことない」って言われたけど、県庁の人がいつも親切にインタビューに答えてくれたり、熱く語ってくれたりしたので、大人でも、真剣に和歌山のことを考えているんだな、それにBさん（大学生ボランティア）からも「和歌山をなんとかせなあかん！」って熱い思いを感じました。これからは私がそんなふうに、和歌山を変えていける人になりたいです。そして自分が知っていることを和歌山のみみんなに伝えていきたいです。そのためにこれから大人になってもそんな勉強をしたいです。A児



政党としての意見やそれぞれの考えを理解したり、疑問に思ったりしたことを話し合うことで、自分の目線で「望ましい和歌山県の姿」を考え、自分は県民の一人であると共に、まちづくりの主役であるという認識を持つ子がいたことをうれしく思いました。学習を通して“和歌山（地域）を愛すること”の大切さを学びました。また、子どもたちの和歌山の未来に対する思いは強く、総合的な学習として、その学習を継続し、多くの人に発信することができました。

ふるさと和歌山発見プロジェクト ～和歌山城たからものさがし～（今年度 4 年生の実践）

今年度も、和歌山にこだわり、和歌山の宝物を発見していくことで、地域を愛する子ども（個）を育てたいと考えています。子どもたちにとって身近な「和歌山城」を、和歌山の“イチオシ宝物”と考え、学習に取り組んでいます。自分たちの「問い」を見つけるため、ただいま、徹底的に観光客の意見を聞き取っています。研究会では、子どもたちの熱意あふれる話し合いを楽しみにしてください。

障害リレー遊び (第2学年)

体育科
2年B組担任
谷口 佳都司



今年度6月に行った単元「障害リレー遊び」では、スピード(速さ、リズム)コントロールしながら3つの障害物を跳び越したり、リードを活かしたバトンパスをしたりして、動きを工夫して折り返し障害リレーを楽しませることを大事なポイントとした。

仲間の動きを見合ったり、仲間と教え合ったりしながら、自分たちに適した動きを見つけ出すために、個人学習カードと学習の進め方を次のように工夫した。

●個人学習カード

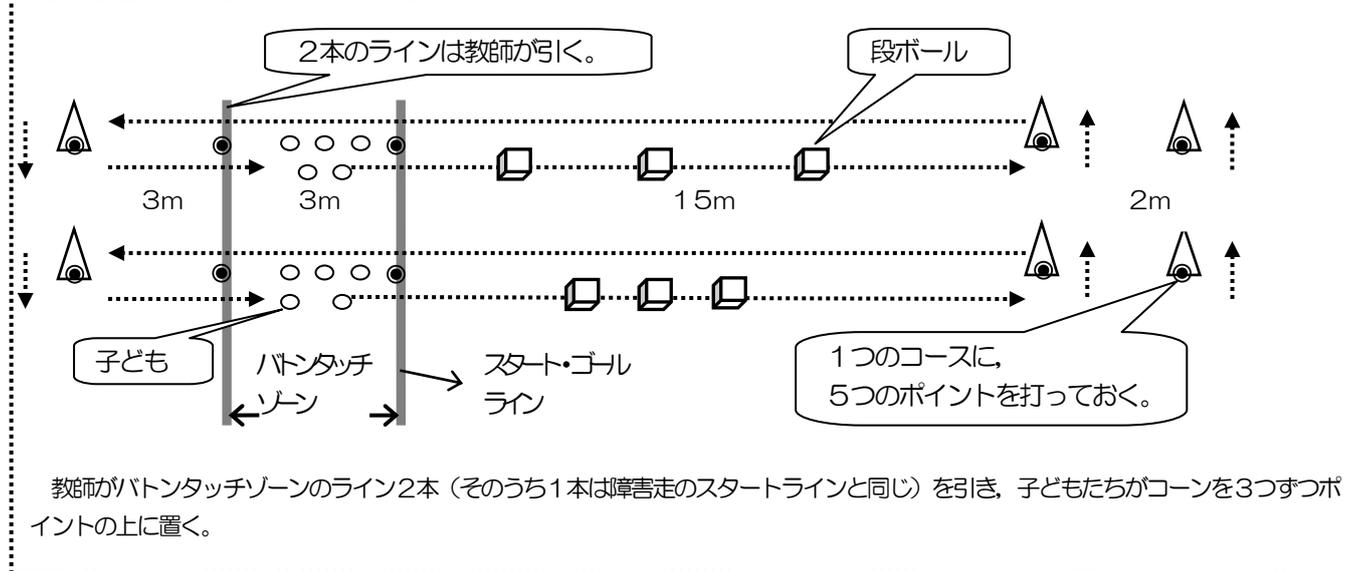
低学年の段階ではなかなか自分の考えを仲間に伝えることが難しいので、個人学習カードに、「誰にどんなことを教えたのか」「誰に何を教えてもらったのか」を毎時間書き込ませるようにした。これを続けていくことで、仲間に発信したり仲間から受信したりできる力が培われ、仲間とのかかわりが少しずつ上手くできるようになった。

●学習の進め方の工夫

- ・低学年の子どもにとって、バトンを扱う経験は少ないので、単元の前半に「向かい合いバトンパス」、後半に「折り返し振り向きバトンパス」をし、抵抗なくバトンに触れることができるようにした。
- ・1チーム5人にして、見合い教え合いで話し合ったことが反映されやすいチーム設定にした。
- ・運動量を確保するために、子どもが短時間で設定できる場にした。
- ・走るのが得意と感じていない子のために、短いコースを選択できるようにした。(競走する時、同じ条件になるように、長いコースを2人、短いコースを3人走ることにした。)



【折り返し障害リレーのコース】



◎成果

グループ学習によって、個々の課題やチームの課題が解決されていく様子が伺えた。例えば、バトンの引き継ぎについては、短い距離ではあるものの、リードを活かしながら片手バトンパスができるようになった子が増えた。チーム対抗のレースでは、誰が長いコースを走るのか、チームの状況を考えながら相談しようとしていた。そして、友だちに声を掛けるのが苦手であったのに、自分のチームや他のチームの応援ができるようになった子の姿も見られた。

バトンを上手く渡すことや障害物(段ボール)を上手く跳び越すことが十分達成されたとは言えないが、チームのメンバーでかかわり合いながら解決方法を考えたり励まし合ったりすることで、運動の楽しさを味わい、運動にもっと取り組もうとする意欲につなげることができたと感じた。

**地球にやさしく・人にやさしく・
自分にやさしい消費者をめざして…**

〔家庭科〕

6年A組 担任
藤原 ゆうこ



◇消費者としての意識をもたせるために

新学習指導要領で新たに加えられることになる「D身近な消費生活と環境」。

「A家庭生活と家族」「B日常の食事と調理の基礎」「C快適な衣服と住まい」3つの領域との関連をはかり、実践的に学習することと明記されている。今回は、B領域との関連をはかりながら、題材「見つけよう！とっておき☆マイライフ」を設定し、子どもたちと学習を行った。

「食事に関わる」と限定した上での買い物意識調査を行うと、消費者としての意識や経験は低く感じられた。そこで、1日の生活リズムから朝食作りの計画をたて、朝食を作るための材料を購入するという設定で、買い物の仕方考えることにした。子どもたちがお家の人や一般の買い物客からの聞き取り調査を行った結果、買い物をする際に気を付けていることは①エコバックを使用すること、②賞味期限（消費期限）を確認すること、③産地”を確認し国産のものや地元の物を購入すること、④値段の安いものやお買い得品を買うこと、⑤新鮮な物や傷みのない物を選ぶこと、等の意見にまとめ、概ね子どもたちが予想していた内容と同じであった。



◇地球にやさしく・人にやさしく・自分にやさしい消費者をめざして

家族で生活しているAさん、一人暮らししているBさん、それぞれの買い物場面をビデオで撮影し、実際に子どもたちに見せ、比較させることで、買い物の仕方について考えるという授業を行った。ビデオを通して今回子どもたちに気づかせたかったポイントは2カ所。

1つ目は、賞味期限が遠いものを選ぶことが本当によいのかどうか。いつ食べる（飲む）のか、購入した分量はどれだけなのか、家族の人数は何人なのか、等いろいろな要因を考える必要性に気づくことになった。場合によっては賞味期限が近い物を購入することが、地球にやさしく、人にやさしく・・・といえるのではないか、そんな話し合いを行うことができた。



2つめは、エコバックを使うことが地球にやさしくて、レジ袋を使うことは地球にやさしくないのかどうか。レジ袋の活用法なども含めて考え合い、実感を伴った話し合いを行うことができた。

◇買い物に出かけて商品を購入してみよう！～実践へつなげる～

学習後、学校近くのスーパーに子どもたちと買い物に出かけた。いろいろな視点で思考をこらしながら、商品を選択し、購入する子どもたち。“地球にやさしく・人にやさしく・自分にやさしく”という視点をもった消費者としての意識が高まりつつあるのを感じることができた。2学期は、「A家庭生活と家族」「C快適な衣服と住まい」との関連をはかった題材を設定し、子どもたちの消費者としての意識をさらに高め、38人それぞれの「とっておき☆マイライフ」を見つけていきたい。



From Editors

『らいぶ・創りえいた一』も10年目を迎えました。
「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を
込めています。
本校ホームページにはカラー版を掲載しています。
ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

編集委員：藤原，上野，梶本，松尾，江田

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp